

令和2年12月1日発行 春燈/第75巻第12号(毎月16日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

12月号  
2020 December



## 安住敦の句

### 木の実独楽影を正して回りけり

『柿の木坂雑唱以後』平成二十二年

敦師は昭和十九年日本移動演劇連盟に転職。二十年春広島へ「桜隊」の宿舎を下見に行く。七月応召して東部三八部隊の対戦車自爆隊に所属。八月六日「桜隊」原爆にて全滅。十二月「春燈」創刊一月号刷り上がる。

人間の生涯も木の実独楽ではなからうか。様々な舞台で、縁ある人々に採まれては、影を正して回り続ける。昭和二十年は、敦師の生死を分ける年であった。

上野進

## 安住敦の句

### 母の句に甘き選者や春星忌

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

この句に出会った時、思わず微笑んでしまった。敦先生も選をする時に、母を詠んだ句には甘くなってしまうのかと、親しみを覚えたからである。

先生の著「随筆歳時記」に、母親を慈しみ大切に思われていた事がよく分かるエピソードが書かれている。幼い時に母と死別した蕪村にも、〈むかしむかししきりにおもふ慈母の恩／慈母の懐抱別に春あり〉「春風馬堤曲」の一首がある。

荒井ハルエ

安立公彦

落日の影のやすけく残る虫

残る虫入り日の影にこゑ正す

温め酒静けき夜を脹らかに

コスモスに和製語要らぬ天晴朗

手折り来し彼岸花挿す場や在らず



燈下集

○ 清水美子

星月夜父に寄り添ふ母の星  
哀しめば低き垣より石榴笑む  
住所録より消す人あまた身に沁むや  
聞きなれぬ虫の声澄む深き闇  
悪評をもものともせずにいぼむしり

○ 片山博介

休耕の田に案山子翁かうべ垂れ  
廃村を抜くるや花野道も狭に  
露けしや変体仮名もて宇徒露とぞ  
筆擱けば鈴虫の闇深まりぬ  
宿運の妻といふべし銀河濃し

○ 府川昭子

猫よりの欠伸をもらふ晩夏かな  
道の辺の穂草となりて風を待つ  
空蟬のたちまち風を呼びにけり  
線香花火二人の手と手重なりて  
菜の甘味噛みしめてゐる寒露かな

○ 今井弘雄



吾亦紅紫紺の空を持ち上ぐる  
ふるさとは「もつてのほか」てふ菊脛  
翾雲ふる里は姉一人なり  
縁側に寡黙な夫婦月見かな  
肩車して子を月に預けけり

○ 永島雅子

朝寒の始発の駅へ急ぐ道  
帰る娘を送る並木や銀杏散る  
船見たき稚と高きに登りけり  
下駄箱の上の小皿の新松子  
枝に揺るる糞虫は何思ひある

○ 矢口笑子

菩提子や「山門不幸」と門前に  
昼の虫鳴いて一言地藏尊  
開発の名を借る破壊いわし雲  
オフィス街の将門塚や雁渡し  
耳かきを探して父の夜長かな

○ 松山三千江

赤とんぼ幼き日々に背を向けて  
愛犬と泊まれるホテル草の花  
梨を食むひとりの音の更けゆけり  
だんまりの本音眼にあり負相撲  
銀杏散る金剛力士の力瘤

○ 篠原幸子

運動会プラスチックの晴れ晴れと  
陶の兎出窓にふたつ月を待つ  
知り人の誰彼想ふ良夜かな  
式部の実人恋ふるかにゆらぎけり  
ひと粒の種をみやげに小鳥くる

○ 藤原若菜

狐花帯状疱疹ひろごれり(院五句)  
朝霧の杜や点滴あとの窓  
風音を繕ふやうに秋の蜘蛛  
秋日影ひとしづくづつけふの落つ  
退院の今朝の贅とて曼珠沙華

○ 大文字孝一

見えぬともよき物のあり秋澄めり  
終着はいま少し先花野行く  
満月やひとりには見せぬ裏の顔  
ここだけの話し漏れ聞く秋の風  
秋晴や数歩で潜る不老門(護国寺)

○ 和田絢子

あんばんで朝をすませる終戦日  
向日葵や人の丈越し俯ける  
振花の相寄り添うて直立す  
かなかなや灯して暗き通し土間  
赤穂城の門太し雲の峰

○ 神田恵琳

葉隠れに雀鳴くなり柿日和  
濃りんどう働き者の母の背  
秋遍路野路に途切るる誦経かな  
杣道の糞虫たるる孤独かな  
秋簾巻く世間話の風に乗り

○ 小山繁子

ミシン糸絡まつてゐる厄日かな  
母郷へとつづく山並いわし雲  
とんぼの空かな生家までの径  
ひよんの笛父母の墓への坂がかり  
山霧や一灯ともる郡の宿

○ 小島昭夫

人妻の愁ひ顔なる風の盆  
鏡花忌やかはうそ遊ぶ桑名宿  
救急車行き交ふ街の残暑かな  
きちかうの一輪挿しに似合ふかな  
「一丘」の先師の回忌秋の寺

○ 渡辺若菜

里芋をふつくら炊いて恙無し  
長き夜やよろずに使ふ大机  
名月を嶺より上ぐる甲斐の国  
不揃ひに並ぶ石仏秋の草  
鱗雲石碑に残る校歌かな

○ 西岡啓子

艦綱のかたき結びや野分雲  
葉月潮突堤白き波をあげ  
仲秋やしづかに濡るる松の幹  
半分は巻あげてあり秋簾  
秋簾駅よりとどくアナウンス

# 余言

安立公彦

この句の主もそのひとりか。それを作者は、「冷やかに影を置きたる」と表現している。この上五中七には、その主を冷たい視線で見る市民の思いが、然りげ無く出ている。独り「築地塀」のみ不動の姿勢である。威儀ある景だ。

御隠居よ夜鳴蕎麦びと次の道

片桐てい女

小面の秋思の艶も素香の忌

鷹崎由未子

「夜鳴蕎麦」を辞書に当たると、「夜間、深更まで路上で蕎麦を売り歩く人。またその蕎麦（饅頭）」とある。発生は江戸時代に遡る。この句、「御隠居よ」と呼びかけているが、御隠居は作者。過ぎ去った往時の一景であろう。

現在「春燈」には卒寿を越す会員が十数人と聞く。てい女さんもそのお一人。皆さんお元気で、毎月の出句を見るのを愉しみにしている。今の日本は百歳以上の人も多いと言う。てい女さんの益々のご健勝、ご健吟を願うばかりだ。へコロナワクチン成るか秋夜の特許庁。同時発表の句。

冷やかに影を置きたる築地塀

三上 程子

コスモスを一輪わたす児の瞳

吉澤恵美子

「築地塀」は、土塀の上に屋根を葺いた塀。身分の高い豪邸を囲む塀。私の郷里にも然る有力者の別邸が台地の上にあり、その塀がまさに築地塀だった。但し、築地塀の主が、庶民に好意を持たれているかは別問題だ。

つ、えも言われぬ悦びが身内を走るのを覚えるのだった。この句を見ながら、私はそういう景を思い浮かべていた。「コスモス」と「児の瞳」の取合せは可憐だ。その可憐さの中に、移りゆく季節の瞬時が佳く表現されている。

捨て畑に遊ぶ雀や秋夕焼

岩永はるみ

観音に母の面輪や秋彼岸

中村紀美子

作者は今年の秋軽井沢に転居。これ迄の成城とは全く異なる環境と思う。この地は標高九五〇メートル前後。「捨て畑」は放置された畑。浅間山を望む「秋夕焼」は殊に壮麗だろう。たまたま手許の八年前の春燈誌を見ると、春燈軽井沢勉強会の記事が出ている。執筆林紀夫さん。大会特々選は岩永はるみさん。へ身に入むや主なき書庫の本の数。これは堀辰雄の書庫。八年前の勉強会の諸事が蘇る。十七文字の俳句の持つ詩情の深さを改めて思う。

母と夫暮らす世のあり月今宵

中野さき江

この「母」は、春燈発足数年後からの先任、中野青芽さん、「夫」はご承知の人も多い中野英伴さん。青芽さんは平成四年、英伴さんは平成二十六年に逝去。英伴さんはその九月号に、自らの遺稿五句を出句している。お二人については、鈴木直充さんが、二十六年十月号に、「中野英伴小論」と題して、十一頁に亘り詳細に記している。

この「児」は幼稚園児だろうか。或る日、外から帰って来た園児が、「ばあばこれ」と、手にした一輪のコスモスを作者に渡す。薄くれないのコスモスだ。園児のつぶらな瞳は作者を見つめている。手に受ける作者はその瞳を見つ

この句、そういう故人の母と夫が共に暮らすであろう天界を、「月今宵」と現在形で叙してあるのがみごとだ。

「観音」は「観世音」。「大慈大悲で衆生を濟度すること」を本願とし、勢至菩薩と共に、阿弥陀如来の脇侍」と、辞書は記す。一般には観世音として、仏に次ぐ崇拜を受け、十一面観世音や救世観世音は善く知られている。

掲出句、「観音に母の面輪や」に、亡き母への思いの深さが善く出ている。母堂には観世音への厚い信仰があったのだろう。「面輪」が、観音と母への思いを重ねる。時は折しも「秋彼岸」、母を含む先祖を祀る季節である。

露の世の野辺の送りの薄煙

齋藤 晴夫

この句の前に、へ糟糠の妻安らかに秋に逝く句がある。長年連れ添って来た夫人の逝去への思いが、余すところなく出ている。新型コロナウイルスの蔓延する中、「野辺の送り」も儘ならない現状である。しかし亡き夫人を送る作者の思いは永久に変はらない。例え「露の世」であろうと、「薄煙」を見遣る思いは不変である。へ秋の灯に作り残せしものの影。遺作があるということは、思いがけない逝去か。謹んで哀悼の意を表します。



春星賞受賞作（20句）

### 今朝の葎薇

大平さゆり

神の留守検査数値のうごめきぬ

初時雨放射線室みな地階

余命てふ言葉飲み込む薄氷

君と行かむ放射線治療といふ焼野

タクシーの夫の膝へと春シヨール

入院の帰りはひとり朧月

病室の白きを出づや花菜畑

初蝶の白に快癒を祈りけり



点滴を見上ぐる一日花の雨

不精髭の男の色気春灯

忘れ霜骨髄注射の痕青く

花の香を髪にまとはせ見舞ひけり

桜隠し見送る君の立つ窓も

こんなにも花盛りの路退院日

浮苗や移植細胞根づけよと

夕虹に抱かる共に生くる街

シャツの袖濡らし持ち来る今朝の葎薇

夫の歩や空の深みに新樹鳴る

信号のマーク駆けだす青嵐

来年は阿蘇を歩かむ夏の空

春星賞受賞作（20句）

### 菩提樹

しのぎぎ智子

菩提樹の陰に昼寝の一家族

片蔭の牛乳売りや牛連れて

子等の声囲む屋台や揚げバナナ

熱風も塵も舞ひ込むリクシヤかな

水瓶を降ろす黒髪夏の露

黒髪の白いリボンや扇風機

手彫り職人親子三代汗光る

サフランライス自慢の店や街炎暑



人も荷物も薙き合へる薄暑かな

雨水の恵みを溜めて行水す

チャイ運ぶ子のサンダルや夏落葉

日盛や城へと向かふ象の列

灼熱の駱駝ゆらりと向きを変へ

機織の音さまざまに玉の汗

糸巻き車止めて夕焼仰ぎけり

停電の屋外食堂夏の月

藁縄を編みしベッドや蚊遣香

花嫁の笑みも涙も喜雨の中

織り上がる藍の絆や秋近し

白檀を彫りし手箱や星月夜

# 当月集

安立 公彦選



○ 佐俣まさを

○ 皂莢の滅びの色や曲輪址  
秋霖や三和土に弾む毬の音  
貫ける片意地ひとつ白芙蓉  
花木權未完の一句反芻す  
一兵てふ師の句碑桜紅葉かな(祐天寺にて)

○ 田中嘉信

○ 中上馥子

新涼や小舟行き交ふ隅田川

遅咲きの百日紅のゆさつくや

湧き水に透くる掌秋日射す

修行僧の読経朗々高野の秋

十六夜や妻に遅れて何時もの歩

嬾やかな百濟観音秋ざくら

秋冷の路地裏暗き燭ひとつ

酔芙蓉程よく酔うてあたりけり

秋彼岸家郷の空の青さかな

畑隅に色付く柚子や祖母恋し

○ 山浦紀子

○ 室井津与志

捻子を巻くメトロノームや原爆忌

城そびえ会津の秋のまつりかな

足跡に貝のかけらや秋の浜

廃屋の庭も天国虫の声

通り過ぐ盆提灯の家族づれ

雨の月「露營の歌」を思ひ出す

中世の運河の家並み月渡る

残り柿鴉こぞりて啗へ往く

吊橋を揺らすや増ゆる赤とんぼ

自肅すや庭に円舞の曼珠沙華

# 春燈の句

安立 公彦選



神奈川 辻 泰子

京都 村上 國枝

新涼や吾に良き友良き山河

夕さればいよよ寂しき女郎花

なかなかの意地の強さよ藪嵐

それなりに卒寿となりぬ野菊晴

渾身の恋か二匹の秋の蝶

岐阜 種田 利子

今日を咲く盗人萩よ刈り取られ

地獄極楽絵図鮮やかに彼岸花

コロナ禍や夜はしづけさの虫の声

古株より芽出し年積む萩なるや

兵庫 片井 久子

敦師の萩やわが萩道へ垂る

つぎつぎに人来て愛づる萩進上

萩の説話万葉集を心読す

岡山 重実ひとみ

秋暑し藤椅子陰に置きしまま

爽さはと空き缶に吹く秋の風

雲行き秋の時雨となりけり  
月昇れるを確かめてより夕支度

繋がるる牛のひと日や草の花

牛小屋の牛の瞳うるむ流れ星

山林の出口入口ぬのこづち

爽籟や渡り廊下を音もなく

無花果や昔ななめに貸家札

秋草や小諸城址にのこる歌碑

桔梗咲く式部ゆかりの京の寺

越えてきし幾山河よそぞろ寒

露草の露玉ひかる散歩道

稲刈るや銃なき戦車コンバイン

脱穀の籾をはきだすコンバイン

万象を潤す森や秋気澄む

野仏を撫でてゆく子やこぼれ萩

空に道あるかに蜻蛉群れゆきぬ

風の意をそこねて散るや桐一葉  
今は亡き師を仰ぐかに月仰ぐ

群馬 小菅 澄重

岐阜 高井 修一

神奈川 犬嶋テル子

神奈川 辻 泰子

岐阜 種田 利子

兵庫 片井 久子

岡山 重実ひとみ